

第47回日本保育学会報告 I

幼児の笑い研究 — これからいずこへ

友定 啓子

一昨年、本誌に連載させていただいた幼児

の笑いの研究を、昨年やつのことで『幼児

の笑い』と発達』（勁草書房）という本にまと

めました。それに、今年になって思いがけな

く日本保育学会の保育学文献賞というすごい

おまけまでいただいてしまいました。

研究方法について

今回の推薦理由の中に、「保育学研究の方

法論および問題意識に新風を吹き込んだ」と

いう指摘がありました。私は自分の研究方法

論を、書物の中ではきちんと展開できていま

せん。ただ、私にはこのやり方しかないのだ

というところでつっぱしってきたように思います。その中で、ひとつの思いとして、観察研究の可能性——つまり、観察研究はほんとうにおもしろいし、がんばれば、かなりのところまでいけるということ——を伝えたかったということは確かにありました。

今になって、つまり一年たって、自分は何をやったのかが見えてきた部分があります。

一番いえることは、私が保育園の子どもたちのところへ通い続けてひたすら記録をとって、あとで理論づけるというこのやり方は、まさに文化人類学という「フィールドワーク」そのものだったということです。文化人類学では、研究者が自ら異文化の人々と生活を共にして、そこで起こったことをこまごまとフィールドノートに書き留め、その社会や文化のしくみなどを記述していきます。参与

観察というのだそうです。

乳幼児も考えようによっては、「異文化」

ともいえます。その異文化の担い手である子どもたちが、どのような世界に住んでいるかを、こちらがわ、つまり大人にわかるように記述するという仕事です。私の場合、その子どもの世界を「笑い」という切り口から記述し直してみたというところでしょうか。

実は、この問題意識はすでに二〇年近く前に「きたないをめぐって」という研究で、よりはっきりした形で持っていたはずでした。「きたなさ」に関する大人と子どもの感覚の違いから入っていったこの研究は、異文化としての子どもを扱っていたのでした。そしてさらに、実は異文化と見えたものが、人間の深層ではつながっていたのだという確認でもありました。子どもは異文化のように見える

けれど、人間としての原型でもある、これは
ユングやフロイトの指摘にもつながります。

しかし、この笑いの研究では異文化ということ
とは一度も使っていません。むしろ逆に
「発達」とか「社会化」という、既存文化へ
の同化過程を意味することばを使っている、
私自身の変化がそこに透けて見えてきます。

研究方法に関して、本田和子氏は次のよう
な指摘をして下さいました。「この本の主題
は人と人との間に現象する間主観的な意味と
しての笑いである。したがって、分析の対象
として資料化され得るのは、研究者自身と子
どもとの間に直接的に現象する笑いというこ
とになる」私はこの主題と方法の連関を明確
に意識していませんでした。むしろ逆だった
のです。研究者と幼児の間に現象した笑いを
追っていたのだけれど——笑いをとらえるに

はそういうかたちが一番自然である——、考
えてみれば、それこそが笑いの間主観性で
あったと。その意味でも、個人観察という方
法をとる私にはよくあっていたテーマだった
ともいえます。

笑いの両義性

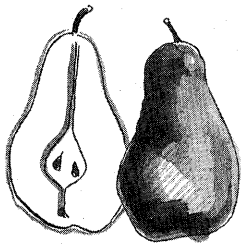
この研究をしながら見えてきたことの一つ
は、笑いの両義性でした。私は「笑い」とい
う明るいテーマをとりあげました。理論上の
困難さは別にして「明るい研究」になる予定
でした。けれど、やはり明るさには影があり
ました。私は天真爛漫な笑顔も好きですが、
陰りのある笑顔の方が気になります。それを
読み解くことは、おそらく自分自身の否定的
な感情を読み解くことにもつながっていたの
だと思えます。それはたぶん私だけでなく、

人間は生涯、自分や周囲の人々の否定的な感情をどう受け入れ、向き合っていくかがいつも課題としてあるのではないかと思ったりします。そこで、笑いの果たす役割は大きいだろうと思います。悲しみを受け入れる、苦しさを笑い飛ばす、権力を笑うなど、人々が長い歴史の中で獲得してきた笑いの知恵と文化がそこにあります。

子どもたちの笑いを観察しての結論は「ただ無邪気に笑っているように見える幼児だけれども、その笑いの中にさえ光と影がある」です。こう気付くと、私たち大人は幼児に向かい合ってあれこれいう人から、共に歩む人にスタンスを変えることができるように思うのです。

また、「両義的な感情」についての論究がまだ残っています。両義的な感情は、原始心

性の特徴でもあり幼児も持っていることから、これは人間の基本的な感情の姿ではないかと思うのです。そういう感情から「進化」したように見える文明人や大人にわかるよう



に記述すると複雑になるだけのことで、幼児にとって決して難しいことではない、むしろ自然なことだと思うのです。なにせ「未分化」なのです。成人だって、この両義的な感情を持っているのですが、それを認知することが少しむずかしいのではないかと思います。

ところで、この両義的な感情に笑いが付随するわけですが、例えば、排泄や性を話題にする時や、なにか悪いことをしようという時にニヤリと笑う、注意された時に笑う、というようなことは、少なくとも大人は意識して教えてはいないはずです。それなのに、幼児は「自然に」使っているというこの不思議さがあります。乳児の「共鳴動作」に似ています。乳児は相手が口をあけたのを見て、自分もつい口をあける、これをどう説明するか

です。学習理論では説明がつかないので「人間は生まれながらにして、人と共鳴しあう、社会的な存在である」という説明をするようです。また、竹内敏晴氏は子どものからだの「共生性」について指摘しています。子どもの行為はよく伝染するとして、泣き、かゆみ、痛みと共におかしさもあげています。子ども同士の間には少し違いますが、子どもも側で、この「共生性」を持っているとしたら、大人の行為を引き写すこともうなずけます。また「子どもたちは、周囲の人々を映し出す鏡の機能を果たす」という、本田和子氏の指摘もあります。いつの間にか模倣の意識なしで行為として大人と同じことをしていると、いう事実があります。このあたりは、おそらく研究が進んでいると思います。確かめてみたいと思います。いずれにせよ、「表情

学習」(もし、そういうものがあるとすれば)あるいは「感情表現」とかいう前に、その内実となる豊かな体験を提供することが重要ということになるのでしょうか。そして、もし子どもが鏡であるというなら、鏡に映るわたしたち大人の責任は大きいともいえます。

笑い理論をもう少し

私は「笑うことは、自分では何もできない乳児にとって、養育者を引き付けておくための生得的な生命維持手段である」というところから出発し、さらに後の親と関係の基礎になると述べましたが、これは生まれたての乳児が満足感のほほえみを浮かべることを想定していたのです。つまり、親と受容の笑いを前提としていたのです。異質な刺激に対応

するものは想定していませんでした。もちろんこれを下敷きにして、両義性または異質性を含むものの同化に笑いが付随することは説明できないではありません。しかし、小此木啓吾氏の指摘にもある「乳児のくすぐり反射が笑いのルートである」ことが十分考えられます。親と受容をベースに発展するのかそれとも、別個のくすぐり反射という機構を乳児がそもそも持っている、笑いの別ルートをつくると考えるかという問題があります。今のところ後者に傾いています。が、検討の余地があります。

また、これに関連して、先行の他分野の笑い研究や理論とのかかわりがあります。部分的な触れかたしかできていないので、ベルクソンから始まる笑い研究の系譜というか俯瞰図を、翻訳されているものだけでも作ってみ

る必要があります。それらに対して私の研究はどの点で意味があるかを述べねばなりません。

最後の大問題として、笑いの「発達」の問題があります。「笑いが発達する」とはどういうことか？ 書物のタイトルは「幼児の笑いと発達」でしたけれど、それは幼児期における経時変化の意味で、それ以上ではありません。笑いの実態的变化と「発達論」のつき合わせが必要になってきます。

また、四、五歳児の事例が少ないという指摘もありました。この年齢は、また別の豊かさを持っているので、これはまた大きな宿題です。だんだん、頭が痛くなってきました。少し時間をくださいというのが正直なところ
です。

参考文献

○佐藤郁哉『フィールドワーク』新曜社 一九九

二

○友定啓子「現象学的保育研究——きたないをめぐって」本田和子・津守真共編『保育現象の文化論的展開』光生館 一九七七

○本田和子「本の紹介」『児童心理』金子書房 一九九三年一月号

○竹内敏晴『子どものからだのことば』晶文社 一九八三

○本田和子『子どもたちのいる宇宙』三省堂 一九八〇

○小此木啓吾『笑い・人みしり・秘密』創元社 一九八〇

(山口大学)